

きであらう。魏書卷十三靈皇后傳(又北史卷十三)に、「後幸嵩高山、夫人九嬪公主以下從者數百人、昇于頂中、廢諸淫祀、而胡

天神不在其列」とみえるものも、やはり同書に記する西域諸國の天神といふものと關聯せしめるのが至當であらう。

畢沅は長安志卷十布政坊の胡祆祠の註に於て、「胡祆神始末見北魏書、靈太后時立此寺」と記して居る。果して靈太后が此の祆祠を建てたといふ特別の證據があるか否かは、自分の知り得ない所であるし、また胡天神の始末が北魏書に見えらると思はないが、靈太后と祆神とを結び付ける點については、かゝる次第で賛意を表し得る。隋代にもこの信仰の存したことは既に論述せられた事^③で、こゝに煩しく繰り返すまでもない。唐初の編纂に係る隋書

(北史魏書にも)には、その西域傳康國(Samar kand)の條に於て、「有胡律置於祆祠」と記し、周書は波斯國の條に、

「俗事火祆神」と記して居るが、同時に隋書の同傳高昌國の條には、なほ「俗事天神」とも書いてある。思ふに祆字は既に明の方以智の通雅卷十一に、「智嘗按、此字起于唐、唐官品有祆正、既通西域、因其言而造祆字、以爲其神、故在〔說文〕新附例」と説き陳垣氏も之に同じた如く、唐初から用ゐ出した新造字に相違ない。宋の姚寬の西溪叢語卷上及び、方以智の通雅卷十一等には、左傳僖公十九年の條に見ゆる次睢之社に附した杜預の註に「祆神」の文字があるといふに基いて、火祆の神は晋代より既に支那に入つたものと論じてゐるが、これは其の祭儀から考へても祆神に關するものとは思はれず、無論陳氏の説いた如く、妖神(もしくは祆神か)の書誤りを基としての考に違ない。竹越博士の左氏會箋にも「妖神」と記されて居る。方以智の如きは前に述べた通り、祆字を唐より起つたものと見て置きながら又按ずるにとしてかゝる考を載せて、前後の矛盾に頓着しないのは不思議である。陳垣氏は玉篇に祆字を収めて居ることを、永樂本や澤存堂本によりて證し、玉篇の出來た當時には、火祆の教は既に支那に